



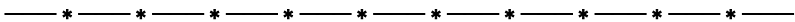
Data

監督・脚本：リュック・ベッソン
原作：トニーノ・ブナキスタ『マラヴィーノ』松永りえ訳（文春文庫刊）
出演：ロバート・デ・ニーロ/ミシエル・ファイファー/トミー・リー・ジョーンズ/ディアナ・アグロン/ジョン・ドイル/オジミー・バルンボ/ドメニク・ランバルドツィ

👁️👁️ みどころ

「マラヴィータ」とは、本作の主人公の愛犬の名前だが、イタリア語で「裏社会」という意味。そう、ロバート・デ・ニーロ演ずる本作の主人公は、FBIの証人保護プログラムの対象となっている元マフィアのボスなのだ。そんな一家が、フランスのノルマンディ地方で織りなす隠遁生活は、いかなる展開を？

リュック・ベッソンとマーティン・スコセッシが組み、ロバート・デ・ニーロが主演した、ちょっと異質な、しかし「家族の絆」を際立たせたストーリーは、メチャ面白い。マフィアだって、こんな家族の絆が！本作から、それをしっかりと学びたい。



■□■日本には存在しない、「証人保護プログラム」に注目■□■

日本では、安倍晋三内閣と自民党が「我が世の春」を謳歌する中、10月25日に秘密保護法案が閣議決定された。さて、あなたはその意義や危険性についてどの程度知ってる？ また、マーティン・スコセッシ監督の『グッドフェローズ』（90年）や、『ペリカン文書』（93年）、『依頼人』（94年）、『フェイク』（97年）、『陰謀のセオリー』（97年）等に描かれたアメリカの「証人保護プログラム」なるものをあなたは知ってる？ これは、人身売買、テロリズム、組織犯罪に絡む事件などの限定された犯罪について、命の危険を冒してまで捜査当局に有利な情報を法廷または上下両院において証言した証人を、いわゆる「お礼参り」から保護するための制度で、日本には存在しないものだ。

ウィキペディアによれば、「該当者は裁判期間中、もしくは状況により生涯にわたって保

護されることとなる。その間、住所の特定されない場所に政府極秘の国家最高機密で居住する。その際の生活費や報酬などは全額が連邦政府から支給される。内通者により居所が知られないとも限らないので、パスポートや運転免許証、果ては社会保障番号まで全く新しいものが交付され完全な別人になる。なお、被保護者の中でもとりわけ、合衆国の国益に多大なる貢献をしたものは相当裕福な経済的援助を受けることもある。居住の場所はアメリカ合衆国内にとどまらず、ラテンアメリカ各国や、在外の米軍基地内、EU領内などのNATO軍の官舎等が割り当てられることも多々ある」とある。

本作冒頭、ブレイク家のロバート・デ・ニーロ演ずる主人公フレッド・ブレイクが運転する車で、ブレイク家の家族4人がフランスのノルマンディ地方の田舎町にある秘密の隠れ家に入っていきシーンが登場するが、このフレッド・ブレイクこそFBIの証人保護プログラムの適用を受けた人物らしい。さて、この男は一体何をしでかしたの？

■□■マラヴィータとは？逃走生活はやっぱり大変！■□■

マラヴィータとは、ブレイク家の4人が可愛がっている大型の愛犬の名前だが、それは、イタリア語で「裏社会」を意味するらしい。つまり、その名のとおり、フレッドは何を隠そう、元ニューヨークのブルックリンでイタリア系マフィアを率いていたマフィアのボスなのだ。そんなフレッドは別の組織のボスを密告したことによって殺し屋に狙われたため、FBIの証人保護プログラムを申請し、適用されたわけだ。本作と同じ日に観た『悪の法則』（13年）でも、マフィアの報復は残忍を極めていたが、ブレイク一家にまちがえられてマフィアの襲撃を受けた、別の4人家族の姿を見ると実に痛々しい。

ブレイク一家の保護を担当するFBIの責任者は、スタンスフィールド（トミー・リー・ジョーンズ）。また、現実にブレイク一家が居住する家を24時間体制で見張るスタンスフィールドの部下がディ・チッコ（ジミー・パルンボ）とミモ（ドメニク・ランバルドツィ）の2人だ。すでにブレイク一家はアメリカからフランスに逃亡していたが、追跡するマフィアの手を逃れるためには3ヵ月ごとに隠れ家を転々としなければならないから、家族も大変だ。ノルマンディといえば、『史上最大の作戦』（62年）で有名な1944年の「上陸作戦」を思い出すが、ノルマンディの田舎町ではアメリカ人はかなり珍しいらしい。フレッドに対するスタンスフィールドの忠告は、「目立たず、地元には溶け込むこと」。そこで、一日中家にいるフレッドは、庭先で対面した隣人に対して自分の職業は「作家です」と答えたが、さてその「化けの皮」はいつはがれるの？リュック・ベッソン監督が描く、FBIの証人保護プログラムの適用を受けた元マフィアであるフレッドたちの逃亡生活は一見ユーモラスだが、その実やはり大変！

■□■この家族の絆の源泉は？■□■

フランスの女流監督ジュリー・デルピー監督の『ニューヨーク、恋人たちの2日間』（12年）では、パリからニューヨークへの3人の闖入者が興味深く描かれ、アメリカ人とフランス人の相違点を見事に際立たせていた（『シネマルーム31』72頁参照）。しかし本作では、ニューヨークで生まれ育ったブレイク家がノルマンディの片田舎で織りなす、アメリカ人とフランス人の違いのドラマが面白い。アメリカとフランスで大きく違うのは食文化。基本的にフランス人はアメリカ人の食文化をバカにしているが、そんな姿勢が露骨に示されると、一見上品そうに見えるフレッドの妻マギー（ミシェル・ファイファー）がそこで見せる対抗策は・・・？また、逃げ回るたびに新しい学校に入らなければならない17歳の長女ベル（ディアナ・アグロン）も、14歳の長男ウォレン（ジョン・ディレオ）も大変だが、この2人だってマフィアのボスの娘、息子らしく、一見おとなしそうだが、いざとなると・・・。

マフィアの家族の絆の強さは、『ゴッドファーザー』三部作（72年、74年、90年）で折り紙付きだが、本作前半では『ゴッドファーザー』におけるコレオーネ家以上にブレイク家の家族4人の絆の強さが目立っているからそれに注目！しかし、この絆の強さの源泉は・・・？



「マラヴィータ」 (C) EUROPA CORP-TFI FILMS PRODUCTION-GRIVE PRODUCTIONS.
DVD+BD 発売中 発売元：ブロードメディア・スタジオ/ハピネット 販売元：ハピネット

■元マフィアのボスは隠遁生活で一体何を・・・？■

60歳で定年を迎えた私の同級生たちは、還暦を迎えた4年前から次々と「引退」しているが、弁護士の私は定年がないから、まだまだ現役。相撲や体操、フィギュアをはじめとする多くのスポーツ選手は旬の時代が短いから、20代30代で引退する選手も多いが、さて、マフィアの世界は？フレッドの場合は、ブルックリンのイタリア系マフィアのボスまで昇り詰めたから、いわば「功成り、名を遂げた」引退だが、まだこの年（ロバート・デ・ニーロの実際の年齢ではなく、17歳の娘と14歳の息子を持つ父親としての一般的な年齢）では、完全な隠遁生活は到底無理・・・？

そこで、荷物を片付けている時に、日本製の古いタイプライターを見つけたフレッドが

思いついたのが、自叙伝の執筆だ。最近の日本では「自分史」の執筆がブームになっているが、13歳の時からマフィアの世界に入り、波瀾万丈の人生を送ってきたフレッドにしてみれば、文章力に自信はなくとも、また、出版してベストセラーになる可能性はなくとも、書くことそれ自体に意味があると考えたわけだ。その気持は執筆活動ばかり続けている私には十分わかるが、もともと裏社会で生きてきた人生をそのまま表に出すことに、妻のマギーは猛反対。また、「証人保護プログラム」の下でフレッドを保護する任務を持つFBIのスタンスフィールドも、そんなことをして目立ってしまえば、フレッドを狙っているマフィアたちの格好の餌食になってしまうことを理由として猛反対。そこで、フレッドは、さすがに出版までは望まなかったものの、ある日、町の住民から、アメリカの古い映画上映会のトークゲストとして招かれると、それに大乗気。フレッドは、スタンスフィールドの忠告のうち、「地元に溶け込め」だけに注目し、「目立たず」を無視してしまったわけだ。フレッドは、人並み以上の「目立ちたがり屋」ではないが、やはり60歳そこそこで完全に隠遁生活に入るのは無理らしい。

しかしある日、世界中に情報網を張り巡らせ、世界の果てまでフレッドを追いかけていく覚悟を固めている裏社会の男たちが、そんなトークショーのチラシを手にしたから、さあ大変。黒服に身を固め、大量の重火器で武装したマフィアの攻撃は容赦がないはず。そんなマフィアたちに居場所を知られてしまったフレッドとその家族の命は、今や風前の灯火に・・・。

■□■巣立っていく子供たちも、最後には・・・■□■

どこの家庭でも子供たちは、成長すれば両親のもとを離れ巣立っていくものだが、本作を観ていると、マフィアの子供たちはその「巣立ち」が早いことがよくわかる。女の子の場合は、恋人ができたことがその契機になることが多いが、男には全然興味がないように見えたベルは、数学オタクのハンサムな代理教師にぞっこんとなり、家出しようとして決意したから、こりゃちよつと意外。他方、息子のウォレンの方も成績優秀ながら、いじめっ子への報復や恐喝行為が徐々にバレてきたから、14歳にして単独でイギリスに渡ることを決意。ベルから、「パスポートもないのに・・・」と言われると、「親父は13歳で独立した。僕はもう14歳だ。」と言いながら、(偽造)パスポートを示したから、すごいものだ。

こんな形で、「絆の強さ」を誇っていたブレイカー一家も、今やバラバラ状態になっていたが、映画のトークショーに出席したフレッドは、自分の得意分野であるマフィア映画『グッドフェローズ』が上映されたため、その弁舌は大いに冴え渡り、苦虫を噛み潰したようにそれを見守るスタンスフィールドをよそに、フレッドは上機嫌。しかし、誰もいない家の中に一人戻ってきたフレッドに対して、列車を降り立ったマフィアの集団は完全武装で今まさに乗り込もうとしていたから、さあ大変だ。たまたま、駅でこれを目撃したウォレンも、また「数学オタク」との恋に破れ、自殺を図ろうとした(?)時にたまたまこれを

目撃したベルも、直ちにその危険を知らせるとともに家にとって帰ろうとしたが、さてその反撃は・・・？さらに、マギーもスタンスフィールドからの緊急の連絡を受けて、待機中のチックとミモに合流したが、その反撃は・・・？

『悪の法則』では闇の組織の顔が全然見えなかったから、逆にその恐さがひしひしと伝わってきたが、本作ではマフィアの男たちの黒づくめの姿と重火器が見えるだけ、まだまだ。しかし、バズーカ砲をいきなり隠れ家の中にぶち込むという彼らのやり方は、やっぱり怖い。これによって、フレッドの側にいた「マラヴィータ」は、大きな怪我を負ったが、さてフレッドは・・・。そしてまた、応援に駆けつけたベルやウォレンたちの、子供ながらあっぱれな活躍ぶりは・・・。ユーモアたっぷりながらも少しシリアスなこの最後の大アクションを楽しみながら、あらためてブレイク一家の「絆の強さ」を確認したい。

2013（平成25）年10月28日記



「マラヴィータ」

DVD+BD 発売中

© EUROPACORP-TF1 FILMS PRODUCTION-GRIVE PRODUCTIONS.

発売元：ブロードメディア・スタジオ/ハビネット 販売元：ハビネット